

みあかり



月讀宮「遷御の儀」(神宮司庁提供)

目次

- 伊勢・原点回帰の場 P 2～3
- 松阪支部神宮大麻頒布活動 P 4
- 豊受大神宮土宮 遷御の儀奉仕 P 5
- 天下の奇祭「夜火松明」神事 P 6
- 温泉郷の雛まつり P 7
- 大杉社の神明杉 P 8

教化特集号 第23号

三重県神社庁
庁報編集委員会

伊勢・原点帰の場

堀木 エリ子



私は日本の伝統産業である和紙を制作している。昨年末、手漉き和紙の技術は、ユネスコの世界無形文化遺産に登録されて話題になった。白い手漉き和紙は、神事や祭事にも使われて日本人の生活に欠かせないものであり、ユネスコによって人類の創造的才能の卓越し

た価値として認められたことは、とても喜ばしい。しかし一方で、消滅の危機にあるものが登録されることを認識し、この機会に気を引き締めて、その技術や想いを次世代へと伝えていかなければいけないと改めて思っている。

和紙の産地を訪れて越前で仕事を始めた当初、職人さんたちの精神性に通じる話を聞いたことがある。「白い紙は神に通じる」：言い換えると、白い紙は不浄なものを浄化するという考え方だ。その精神性は、現代でも慣習として一般の生活の中で育まれている。お金にいろいろ白い封筒は、祝儀袋やポチ

袋といわれる。また、品物の上に掛ける白い和紙を熨斗紙という。これらは、お札や品物を白い和紙で包み込み、浄化してから人に差し上げるために使われる。まさに、人が人を思いやる気持ち、おもてなしの原点に直結した行為だ。

職人さんたちは、より白い和紙、より不純物の無い和紙を作るため、冷たい水に手をつけて、一五〇〇年の歳月、黙々と原料準備や紙漉きを行ってきた。日本は、ものづくりににおいても、神様に通じる美しい精神性をしっかりと持っている。

そのような和紙の世界に入った私は、伊勢との不思議なご縁をい

ただいている。和紙の会社を立ち上げた後、前例のない抄紙技術や表現方法への挑戦をしつつける中、和紙の歴史を勉強しようと思いついて専門書を読んでいると、「伊勢の堀木家が」と目についた。私自身は京都生まれ、大阪育ちだが、父は斎宮、母は松阪出身だ。私の本籍地は今も父方の本家である三重県多気郡明和町にあるが、なんと、同じ住所が和紙の歴史の本に載っていた。

昔、伊勢神宮にお参りをする人は、動物の革でできたお財布やたばこ入れを持って鳥居をくぐることはせず、革のように加工をした和紙でできたものに差し替えてお伊勢参りをしたという。その和紙を擬革紙ぎかくしといい、小物から大きな壁紙まで発展して、パリの万博やバルセロナ、ロンドンの万博で受賞しており、それは堀木忠兵衛、忠次郎、忠太郎の「三忠」という会社だったと書いてあった。

私は、高校を卒業して都市銀行に就職をした後、たまたま和紙の商品開発をする会社に転職した。しかし、その会社は機械漉きとの価格競争に勝てず、二年間で閉鎖をしてしまった。職人さんの尊い営みが、高い安いと計られて衰退していくことに問題意識を持って、なんとかしなければという使命感が涌き上がり、二十五歳で起業した。

その後、建築空間への手漉き和紙の提案をするために巨大な和紙制作に取り組み、ハノーバー万博や上海万博の折に要望をいただいで作品を出展している。

ご先祖様が和紙の世界で活躍していたことをまったく知らずにこの世界に導かれ、同じように世界へ向けて新しい和紙の提案をさせていただいているのは、まさに時空を超えたご縁の賜物だ。

起業をした当初、周りの友人知人から和紙の事業をすることに猛反対をされた。その理由は、大学

でアートやビジネスの勉強をしたわけでもなく、職人さんのもとで修行をしたわけでもない私が、ものづくりの仕事などできないということだった。私は、ものづくりとは一体何かを原点に返って見つめてみた。

埴輪や土偶は、時代を超えて私達を感動させる造形だ。それらは、亡くなった方と一緒に墓に埋葬したり、身代わりに割って健康を祈るための人型だ。

しかも、その時代、彫刻の大学も土偶の専門学校もない。ピラミッドの建築も、埋蔵されているジュエリーも、学校で習ってつくられたものではないことに気づいた。

つまり、人間は皆クリエーターであり、大学でアートやデザインを勉強しなければものづくりができないということはないし、ものづくりの原点は、自然に対する畏敬の念と、命に対する祈りの気持ち

が根底にあるのだということも理解し、それは、いつの時代もかわらないのではないのかと感じた。

伊勢神宮は、訪れる度に、そのような自然や命に対する人の想い、ものづくりの原点を再認識する場だ。今思えば、幼少の頃からお盆とお正月には伊勢を訪れ、すがすがしい神宮の空気を胸一杯にして、その都度、子供心に小さな決意を神様にご報告していたその地から、大きな力と勇気をいただいていたのだ。

素晴らしい日本の匠の技を受け継ぎ、日本人の美学や精神性を凝縮した「美し國」伊勢。時折、心洗われる聖域を訪れ、原点に戻って自分自身を見つめる時間が、「その次の第一歩」を歩み出すための新たなパッションを与えてくれる。



プロフィール

堀木 エリ子

(ほりき えりこ)

昭和三十七年生まれ

昭和六十二年 SHINUS設立

平成十二年 ㈱堀木エリ子&アソシエイツ設立

建築空間に活きる和紙造形の創造をテーマに2700×2100mmを基本サイズとしたオリジナル和紙を制作。和紙インテリアアートの企画から制作、施工までを手掛ける。

主な作品は、成田国際空港第1ターミナル、東京ミッドタウン、ザ・ペニンシュラ東京のアートワーク等。著書に「堀木エリ子の生きる力」リストの「思考術」など。

松阪支部

神宮大麻頒布活動

三重県神社庁松阪支部（奥出克尚支部長）は、平成二十三年度から三年間市内の新興住宅団地での神宮大麻の頒布活動を行ってきた。しかし、非包括神社の氏子地域内にある新興団地を対象としていたことや、神職有志十数名の活動のみに終わっていたこと。また、最



終年の成果も四十一体の頒布に止まったこと等多くの問題が指摘されていた。

これらを教訓として、二十六年からの教化活動については、改めて神職会で検討を行い、別の新興団地で神宮大麻の頒布活動を行うことになった。また、今回の取り組みは、包括神社の氏子地域内の新興団地を対象として、総代をはじめ神社関係者にも理解や熱意があるところでの活動をと考えた。

この結果、松尾神社（岡村行通宮司）の氏子地域内にある新興団地（平成町）を対象にする方向で進められた。対象の団地は約二十年前に開発された大規模団地で、戸数は九百戸弱、これまで頒布活動の対象外とされていた。近年、年越し参り等に団地の方

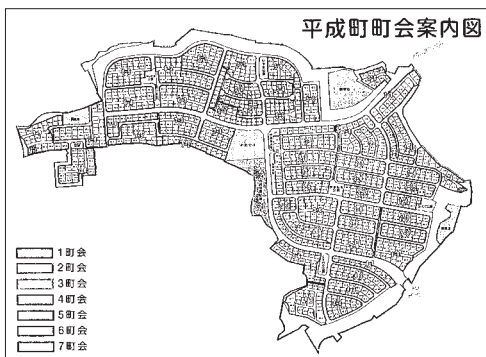
を見かけるようになってきていることとあいまって、当団地の自治会長が旧氏子地域出身の方となり、全面的な協力を得られそうであること等から一気に話が進んだ。

頒布活動の具体的な事前打ち合わせを十月一日に奥出支部長をはじめ教化委員二名と松尾神社の禰宜、責任役員二名とで行い、十一月三十日を実施日と定め、全体的なスケジュールや役割分担を取り決めた。

対象地域へは自治会経由で頒布活動を予告する文書を回覧し、活動当日早朝から新嘗祭を齎行して、神社役員が参加しやすい条件を整え、九時半に遥拜所で開始式、打ち合わせの後各班が担当地域へ向かった。

編成は、白衣白袴の神職十名と社名入りの肩掛け（略式小忌衣）を着用した神社関係者十三名で八班。午前十時頃から頒布活動に入った。約一時間の昼食休憩を挟んで午後五時頃まで熱心に行われた。

平成町町会案内図



その結果、百三十二体（神社の神札は百十一体）の頒布実績を上げるに至った。

事後の反省では、自治会を通しての事前周知、地元の関係者と神職の組み合わせによる班編成等は、相乗効果を挙げて、大きな成果につながったとの意見が多くあった。今後は、残る二年間でいかにスムーズに地元を引き継ぐ準備が整うかであろうということであった。

豊受大神宮

つちのみや

別宮 土宮遷御の儀奉仕

猪田神社 宮司 田 幸 尋

平成二十七年一月二十八日、豊受大神宮別宮土宮の遷御の儀が斎行され、この度、三重県の代表としてご奉仕させて頂いた。別宮とは御正宮に次いで尊いお宮のこと、内宮には十所、外宮には四所が御鎮座しており、それぞれで御正宮と同様に遷宮がおこなわれた。各別宮では、今次初めての試みとして、各県一名が宮掌補として祭儀を奉仕する機会を賜った。当日は、三重・神奈川・奈良・広島・愛媛の五県より五名が奉仕した。二十七日、外宮齋館に集合し改服、潔斎ののち、渡邊禰宜より宮掌補の辞令を交付頂いた。

午後一時半より川原大祓（御装束神宝と奉仕者を祓い清める儀式）と遷御の儀の習礼をおこない、全

体の流れを確認。二時より各々が著装。神宮では遷宮諸祭にしか著けない衣冠に、左肩から掛明衣を著けて神事に臨んだ。三時、外宮齋館前庭に大宮司以下祭員三十五名が列立し、三ツ石前（外宮、中ノ御池のほとり）の川原祓所に参進。祓ののち、宮掌が祝文（祓戸の大神の靈威をたたえる祭文）を奏上し一拝二拍手一拝。大宮司以下祭員も蹲踞（しゃがんだ姿勢）のまま一拝二拍手一拝にて拜礼。その後、土宮に参進し著版（ゴザに著座すること）ののち、八度拜をおこなった。

翌日午後六時、潔斎ののち、昨日同様に衣冠、掛明衣を著装し、七時、浄闇のなか大宮司以下祭員三十五名が齋館御門にて、御塩の

清めを受け参進。多くの参列者が見守る中、土宮本殿前に著版。大宮司が祝詞を奏上。禰宜が本殿御扉を開き、各員遷御の準備に取り掛かる。神宝を捧持する宮掌、宮掌補は白手袋を著け、本殿前両脇に列立。召立て所役により「右おんやなく、御胡籙 宮掌補 幸尋」と読み上げられると、対となる時田宮掌とともに御門前まで進み、御胡籙を受け取り右高に捧げ持つ。（内宮



では内側に捧げ、外宮では外側に捧げ持つ）矢の入った漆塗りの胡籙は想像よりずっしりとした重みがある。列次を整え出御を待つ。「カケロウ」と鶏鳴三声、大宮司の「出御」三声ののち、御列がゆっくりと進み始める。雨儀廊の柱に神宝が当たらぬよう注意深くしっかりと捧持して新宮へと向かう。絹垣で囲まれた「御」が目の前を通って新宮内へと入御されると、再び召立ての呼び出しに応えて、新宮へと納めていく。すべてが納められると、一同新宮前に著版。御扉が閉じられ、大宮司以下祭員は八度拜をおこない退下した。

翌朝午前七時、潔斎ののち、大御饌（新殿に遷御後はじめて神饌をお供えする儀式）に続いて、午前九時からの奉幣（陛下からのお供え物を奉る儀式）をそれぞれ奉拝させて頂き、土宮遷宮が執り納められた。

天下の奇祭「夜火松明」神事

いなべ市大安町丹生川上に鎮座する鴨神社（梅山兵治宮司）では、三年に一度、十月の例祭にあわせて、市の無形民俗文化財に指定されている「夜火松明」神事が執り行われている。

この神事は、御神体を受ける際、山越えが夜になり、松明で御神体を迎えたことが始まりと伝えられている。

歴史ある神事は、先ず「やほやろかろ」「やほいらんかろ」「やほ持ってこい」と言う掛け声が境内に響きわたる「夜火振り」から始まる。夜火の開始と同時に、仕丁役の氏子が拍子木を鳴らしながら、宝物殿に保管されている神宝の刀・弓矢を貸してもらえよう、七度半に渡って宮司宅までお願いに行き、本殿での祭典を執り行なう。

そして宮司の祝詞奏上後、いよ一三〇〇年余りの歴史を誇る神社の松明神事が始まる。

境内の土俵に置かれた、長さおよそ四メートル、

重さおよそ八〇

〇キロ、雄雌一

対の松明に火が

付けられると、

「でやでや」と

言う独特の掛け

声と共に、二つ

の松明の「蒸し

合い」が激しく

行われ、炎が勢

い良く燃えさか

る中、松明が鳥

居の下まで運ば

れる。

そして、そこ

で鳥居を焦がし、

再び土俵へと戻り、これを三度繰り返す。

神事の結びは、各自治会から一人ずつ選ばれた四人の役男が、

松明で荒れた土俵を神宝の弓で清める「鳥追い」、そして神刀を携

えた「飛角力」で締めくくられる。こうしたことから、昔より「面

白いぞえ 丹生川の祭り夜火に松明「飛角力」と言われ、大変勇壮で厳肅な神事を見ようと、毎回多くの参拝者が訪れている。

また、現在は五穀豊穡を願う神事としても執り行われている。

鎮座地 いなべ市大安町四二九



温泉郷の雛まつり

津市榊原町のほぼ中央に鎮座する射山神社（宮口重明宮司）では、二月十一日から三月初めまでの期間、雛人形の展示公開をしている。

榊原といえば、平安中期の才女清少納言が「湯はななくりの湯」と称えた榊原温泉である。ここでは以前より神社と旅館組合などで



構成する会を作り、榊原の活性化や発展を目指しさまざまな取組をしている。

射山神社のご祭神は、温泉の神と縁結びの神として知られる大己貴命で、大黒さまとして親しまれている。境内には大きな袋と小槌を持った大黒像が鎮座し、小槌にふれると良縁が授かるとされ、小槌は「恋こ槌」と呼ばれている。そして、神社は古来から良縁の神と慕われてきた。

こうしたことから神社を中心に旅館や関連施設などで雛人形を飾り、それぞれに工夫をこらして訪れる人を迎えようと「恋の湯治場・榊原温泉のお雛さま」として公開がはじまった。

射山神社では、社務所の四十畳程の座敷にいくつもの段飾り雛や内裏雛に地元幼稚園児の手作り雛



などが並び、華やかにかわいらしく女の子の健やかな成長を祈るように展示されている。

しかし当初から人形があった訳ではない。宮口宮司は、人形をどうしたらよいか悩んだそうである。氏子や知り合いに貸してもらえるところを探し、やっと協力してもらえるところも見つかり展示することができた。回を重ねるにつれ、「神社で飾ってもらえるならありがたい」と多く寄贈してもらえるようになった。

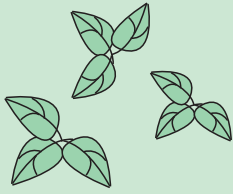
人形のなかには、先祖が久居藤堂藩の殿様の「お乳母さん」として仕えたことから拝領した内裏雛など、年代ものの展示もある。人形の飾りつけは近所の方が手伝い、来訪者の接待も引き受けている。

雛人形の他に狩衣や十二単の装束もあり、試着体験もできる。地元幼稚園児の家族が次々と我が子の作品を見に訪れていた。

この期間中にお雛さまにちなみ、夫婦の絆を深めてもらおうと、「恋のひと言」として夫婦の思いを込めた短文を募集し、優秀作品の夫婦を招き、「記念婚式」を行っている。展示してあった狩衣・十二単姿の夫婦一組と他の夫婦達もが嫁入行列を組み神社へ向い式を挙げる。

神社の伝統行事に加え、地元との相互協力で活性化を計ることで、参拝者も増えてきている。多くの人に榊原に来てほしいという宮口宮司の思いに、温泉より熱い心を感ずることができた。

鎮座地 津市榊原町五〇七三



大杉社の神明杉



三重県北部、岐阜県との境に近い桑名市多度町美鹿地区に鎮座する大杉社（塚原徳生宮司）は、その由緒は詳らかではないが、『神社明細帳』に大杉神明宮ともしるされている。社伝および古老の伝えるところによれば、当地区は伊勢の神宮の神領地であったといわれ、『伊勢田』と呼ばれる地名に神宮との御縁を今に伝えている。

それは、崇神天皇の御代に、それまで皇居にて同じ御殿にお祀りされていた天照大御神を、そのご神慮を畏み、とよすきいりひめのみこと豊鋤入姫命が大御神を奉じて倭かきぬいむらしき いっかしの笠縫邑磯城の巖櫃の本に「磯堅城の神籬」を立てたことに始まる。次の垂仁天皇の御代に倭姫命がより理想的な鎮座地を求めて各地を巡られた際に、当社の境内にもおとどまりになったとの伝承をもつ元伊勢の一社であると、境内の石碑に記されている。



その境内には杉の古木が六本あり、中でも大きな木は古来、神の依代として地元の尊崇を集めており、神明杉と言われている。

その神明杉は、樹齢は900年を超え、幹回りは約7メートル、地上2メートルのところでは2つの幹に分かれ2本の木が合着したような特異な形をしている。唐の詩人・白居易の『長恨歌』に「天に在りては願わくは比翼の鳥と作り、地に在りては願わくは連理の枝と為らん」と詠まれる「連理の枝」になぞられて夫婦杉ともよばれる。その神気みなぎる姿は、昭和18年に三重県の天然記念物として指定されており、社名の「大杉」もこの杉に由来するとされている。

鎮座地 桑名市多度町美鹿544

教化にともなう原稿・ご意見を募集しています。（下記編集委員まで）

教化部長	森本 巖	（北牟婁）
編集委員長	宇治土公貞尚	（伊 勢）
委員	平野 直裕	（桑 名）
〃	遠藤 玲	（員 弁）
〃	西尾 直也	（志 摩）
〃	多田久美子	（津 ）
〃	秦 昌弘	（四日市）
〃	中山 清治	（松 阪）
〃	宮田 幸尋	（上 野）
〃	原 忠照	（神社庁）

御社名欄にご利用下さい。

発行所 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成27年6月30日